

林田慎之助著 『中國中世文學評論史』

小西, 昇
福岡教育大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/9776>

出版情報 : 中国文学論集. 9, pp.149-180, 1980-11-01. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

林田慎之助著『中國中世文學評論史』

小西昇

孟子は、弟子のひとりから「先生は議論好きだと評判になっています。どうして辯を好むのですか。」とたずねられたとき、「われは豈に辯を好まんや、われはやむを得ざるなり。」と答えたという。「わしはやむをえずにやっているだけのことじゃ。」と。これだけだとやむをえずひきうけたわたしと、たいして違わないのだが、そこは孟子、やむをえぬ理由が全く違う。邪惡な論説をやめさせ、一方にかたよった誤りの行爲をしりぞけ、でたらめな言葉を追放し、「以つて三聖者を承けつがんと欲す。」そのために辯説をふるうのであって、「われ豈に辯を好まんや、われ已むを得ざるなり。」という。やむをえないといっても、孟子には内から迸る正義があるのである。これに似たことをいった人がいた。林田氏も論じている「文心雕龍」の著者劉勰である。「君子の世に處するや、徳を樹て言を建つ。豈に辯を好まんや、已むを得ざるなり。」と。決していたずらに辯を好むのではない、そこにやむをえないものがあるのだと。彼にも孟子とは違った理由がある。人間の肉體は草木のようにもろくとも、名聲は金石にもまさって不滅である。それをこい願つて五十篇からなるこの書をあらわすという。やむをえないのは、名を

残したいという激しい欲求の前にやむをえないのである。わたくしごときの、やむをえないとはわけが違うのである。こういうと、いささか氣がひけるが、わたくしの「已むを得ざるなり」に執着していくほかない。

ところで、林田氏のこの書をいちずに批評するのではなくて、この書が対象としている問題の原點に立ち歸つてみたり、その問題の歴史的經過に觸れてみたり、幅廣くといえればあるいは淺くなるかもしれないが、感じたこと、整理を試みたことを述べたいと思う。しかし、こんなことをいって餘りに漠然としても困るので、あらかじめいくつかの項目を明らかにしておきたい。一は、中國中世文學の批評の分野で、先達の研究者が何を批評の対象として選んでいるか、この分野で何が研究のテーマたりうるのか、その先達の研究における共通する問題意識は何か、その成立の過程について。二は、本書の題目が「中國中世文學評論史」と稱する所以は何か、つまりこの書が取り扱っている漢魏晉南北朝隋唐の時代を中世と呼ぶことの是非、及びその歴史認識について。三は、本書の特色について。林田氏の研究の展開過程と問題意識の變遷。四は、「創文」一九〇號に發表された興膳宏氏の「書評」について。そして五は、結びといった順序で進めたい。

一

本書の批評にはいる前に先達の研究成果を検討することから始めたい。林田氏もいうように、この分野のすぐれた研究は、鈴木虎雄著「支那詩論史」、青木正兒著「支那文學思想史」、郭紹虞著「中國文學批評史」、羅根澤著「中國文學批評史」、朱東潤著「中國文學批評史大綱」等をあげることができよう。わたくしは、これに魯迅の「魏

晉の氣風および文章と藥および酒の關係」を是非加えたいと思う。そしてこれらの著書はそれぞれの視點と方法によつて特色のある研究を達成しながら、しかも共通する問題意識に支えられていることも事實である。それは漢末魏初における文學の道德からの獨立、文學の自らの價値の自覺、文學批評の成立という問題である。しかも、その共通認識の出發點、あるいは原點となつたのは、鈴木虎雄著「支那詩論史」、特に第二篇の「魏晉南北朝時代の文學論」である。そこで鈴木氏のこの文章と、さきあげた諸氏の論文著書との關係、特に魯迅の「魏晉風度及文章與藥及酒之關係」との關連を明らかにしてみたい。次に今日の魏晉南北朝文學研究者のほとんどが支持するほど鈴木氏の畫期的な學説が、一體「どこから來たのか」、明らかにすることができれば明らかにしたい。この二つの作業は林田氏の著書の原點とも前提ともなる問題の検討となるであらうと思う。

一九七九年再版の、復旦大學中文系古典文學教研組著の「中國文學批評史」上册を讀むと、第二編第一章魏晉の文學批評「文章の價値と效用」の項のなかで次の文章があつた。

「専門の學術的著作を重視するのは、漢代知識人の傳統的な氣風であるが、曹丕が詩や賦の價値をこのように高めたのは、建安時代の新しい現象といわなければならない。その精神的特徴は、文學觀念が次第に明確になつたことであり、文學が自らの價値を自覺したことである。まさに魯迅のいったように「近代的な文學觀からみるならば、曹丕の時代は『文學の自覺時代』であつたといえます。」（《魏晉の氣風および文章と藥および酒の關係》）まさにこのようなことのために、わが國の文學は建安時代に始まり、詩文辭賦といったたぐいの文學作品は次第に人々に受け入れられて重視され、文人の社會的地位も高められた。このことは、わが國の文學

が獨立しまた發展していったことの目じるしである。曹丕は行動の上で文學の提唱に大いに努め、文人を優遇したばかりでなく、理論の上でもこの時代の文學思想の新しい傾向を有力に反映したのである。」

と。復旦大學の研究者たち（王運熙氏を含む）は、漢末における文學思想の變化、文學の自覺の論述に、魯迅を有力な根據としてあげている。魯迅のこの文章「魏晉風度及文章與藥及酒之關係」は、廣東の知用中學及び市教育局が開いた「學術講演會」で講演されたもので、一九二七年七月である。ところで、青木正兒著「支那文學思想史」の序によると、「さて和漢の學界に於て此の方面に先鞭を着けられたのは吾師鈴木豹軒（虎雄）先生の『支那詩論史』大正十四年弘文堂刊であつて、漢譯も行はれてをり、支那でも其の影響を受けて一二同類の著書が現はれてゐる。」という。大正十四年は一九二五年で、魯迅の講演より二年前のことである。しかも魯迅の「曹丕の時代は『文學の自覺時代』であつたといえます。」という文は、鈴木虎雄氏の著書の「余は魏の時代を以て支那の文學上の自覺時代なりとなす。」という文に非常に近似しているし、また魯迅は括弧に入れて「文學的自覺時代」とし、同じことばを使っているのである。すると、魯迅は、鈴木氏の著書を読んだ可能性があるのではないかと思う。そこで青木氏のいわれる、鈴木氏の著書の中國譯とその影響を受けた一二同類の著書について調べてみる。「京都大學人文科學研究所漢籍分類目錄」によると、「日本鈴木虎雄撰 孫俣工譯 中國古代文藝論史 民國一八年一〇月」とある。民國十八年は一九二九年で、魯迅の講演より二年後であるから、この譯本は讀めない筈である。また、一二同類の著書については、青木氏自身が別なところで「特殊なる分野を開いたものとして、吾師鈴木豹軒先生の『支那詩論史』の如きも逸早く模倣者を出し、陳鐘凡・郭紹虞二氏の『中國文學批評史』の類が文學史界の一角を

占めて居る。」(昭和十二年六月「東京帝大新聞」に載る「支那文學研究に於ける邦人の立場」)と述べている。陳鐘凡氏の著書がいつ出版されたか分らないが、その書評が「圖書評論」の第一卷第五期に載ってそれが一九三三年(民國二十二年)一月である。書評が二年も三年もたつて行われることはなからうから、陳氏の著書はだいたい一九三一年か一九三二年の作であろう。郭紹虞氏の著書もいつの出版か正確には分らないが、李立明著「中國現代六百家小傳」によれば一九三四年(民國二十三年)となっている。するとこの二氏の著書は魯迅講演以後のこととなって講演のあつた一九二七年以前に魯迅がこれらの書を見ることはない。

以上のように魯迅が「支那詩論史」の譯本および同類の「模倣」書を見ることがなかったとすれば、次に考えられることは、魯迅が鈴木氏の「支那詩論史」と全く關係なくさきの主張を出したのか、あるいは當時厨川白村の「苦悶の象徴」などを翻譯するほど日本語ができたのであるから、直接「支那詩論史」を読んだのか、この二つの可能性である。まず後者を確かめるために、一九二七年七月二十三日の第一回講演のあつた時までの魯迅の日記を調べてみる。

日記十三(一九二四年)五月二十三日、「中國中古文學史」「詞餘講義」「文字學形義篇」および「音篇」それぞれ一冊を買う。計一元。

とされている。この「中國中古文學史」は劉師培の著で魯迅が「魏晉の氣風および文章と藥および酒の關係」のなかで他の二冊と共に「われわれの研究にとっては大へん参考になります。この時代の文學がたしかに異彩あるものであつたということをわれわれによく知らせてくれます。」と高い評價を下した書籍である。この著書は、魯迅

の購入書籍備忘録ともいふべき「書帳」には「中古文學史講義」と記録されている。魯迅はこの著書から強い影響を受けたようである。

日記十四（一九二五年）九月十五日、

東亞公司にいつて「支那詩論史」一冊、「社會進化思想講話」一冊を買う。計四元。

とする。東亞公司是、前後の日記から日本の書籍を取り扱っていた書店と思われるので、この「支那詩論史」は鈴木虎雄氏の著書であると思う。「書帳」には「中國詩論史」となっている。魯迅は一九二七年七月の講演に際して、漢魏晉南朝文學關係の書籍を購入し讀んだものようである。「漢魏六朝名家集」「建安七子集」「曹集銓評」「箋注陶淵明集」など。鈴木虎雄氏の著書は、この「詩論史」のほか、

日記十五（一九二六年）の「書帳」に、

支那文學研究一本六・七〇 二月二十三日

の記事がある。これも著者名が明らかにされていないが、「詩論史」と同じく大正十四年弘文堂から刊行された鈴木虎雄著「支那文學研究」のことであろう。

このようにみえてくると、魯迅の「魏晉風度及文章與藥及酒之關係」という文章が、鈴木虎雄氏の「支那詩論史」から一定の影響を受けたことは、否定できない事實であろう。（本來は内容に即してこの點を更に検討しなければならぬが、紙幅もないので他の場面にゆずりたい。）思うに魯迅のこの文章やその發想の成立には、次の三つのことが影響を與えたのであろう。一つは林田氏の論文「魯迅のなかの嵇康」で指摘するように、「一九〇八年、民

報が發禁になつたとき、魯迅は友人とともに、民報社で説文解字の講釋をしてくれるように章太炎にたのみ、かなえられている。章太炎と魯迅のつながりと章太炎が魏晉の文章を提唱した時期と考えあわせると、魏晉の時代にたいする魯迅の關心はほぼこのころからおこり、しだいにふかめられていったと思われる。」という。章太炎の影響である。二つは既に述べたように、劉師培著「中國中古文學史講義」からの影響である。魯迅が漢末魏初の文章を特徴づけて「清峻、通脫、華麗」といったことばを使うが、それは、劉師培のこの著書にすでに述べられており、魯迅が使用する時人の逸話・文章のいくつかも「中古文學史講義」に見ることができる。三つはすでにふれたように鈴木虎雄著「支那詩論史」からの影響である。いうまでもなく魯迅は、これらのものからの影響を受けながらも、彼独自の認識と創見に基いてその考えを述べたこと、また當然であろう。

次に鈴木虎雄著「支那詩論史」について述べたい。この書が大正十四年弘文堂から刊行されたことは既に述べたが、その序によれば、ここで問題にする、「詩論史」の第二篇「魏晉南北朝時代の文學論」は、大正八年十月より九年三月に亘り、「藝文」誌上に公表されたという。「東方學」第五十二輯にのせる「鈴木虎雄博士著作目錄」によると、同論文は、實際は「『藝文』一〇年一〇號、一一號、一二號。一一年二號、三號」に載つたようだ。これ以前、鈴木氏は魏晉南北朝文學について、「山水文學と謝靈運」（明治四四年）と「五言詩發生の時期に關する疑問」（大正八年）を著わすのみで、この時期の文學評論に關しての著作は一篇も見られない。しかし「詩論史」第三篇の「格調・神韻・性靈の三詩説を論ず」が明治四十四年に執筆され、「藝文」に發表された。このことは、詩論、文學論に對する強い關心が鈴木氏にあったことをうかがわせるに足るものであらう。すると、鈴木氏は詩論・文學

論に對する強い關心と研究を、いつ魏晉南北朝時代に向けることになったのか、その契機が何んであったかが問題となる。それは鈴木氏の中國への留學（一九一六—一九一七年）ではなかったかと思う。「鈴木虎雄博士略歴」によると、「大正五年一月（三九歳）漢學研究のため支那國へ二か年留學を命ぜらる。（三月三十日出發）」とある。そして留學後一年半にして「魏晉南北朝時代の文學論」の發表ということになったのである。わたくしは、魯迅がその研究に強い影響を受けたと思われる劉師培氏と、鈴木氏もその「出會い」があつたのではないのだらうかと思つた。

それには確たる證據を今のところ見出せない。しかし錢玄同の作る「左倉年表（劉師培年表）」によれば、「一九一七（民國六）年 丁巳三四（歳）任國立北京大學教授」とある。また同作「左倉著述繫年（劉師培著作目錄）」によると、「六年丁巳 中國中古文學史講義」とあり、同書の人民文學出版社の出版説明によると、「中國中古文學史講義は、劉師培（申叔）が北京大學で教育研究にたずさわつた時に編集したものである。」と。鈴木虎雄氏の中國留學中に、劉師培氏は北京大學教授に任命され、「中國中古文學史講義」を講じていた。しかもこの講義はそのまゝ民國六年（一九一七年）に出版されたのである。

劉師培著「中國中古文學史講義」は、その特徴をあげると、その第一は文學史、文學論に關する資料がくまなく探索されていること。同書の第三課に限つても、文心雕龍19、魏志19、文選11、そのほか書名だけあげると、蜀志、吳志、魚豢魏略、藝文類聚、太平御覽、初學記、群書治要がある。また同書の「聲律說之發明」などの如きは、それに關する基本的な資料があげられていると思う。その第二は、建安以後三國の文體が兩漢の文體と異なるという事例をあげ、この時期に文學が變遷したことを明言したこと。そしてその理由の一端をあげ、「建安文學は

實に文帝陳思王の上において提唱するに由るなり。」という。その第三は、文學批評の發生について説く。例えば曹丕、曹植について、「魏文帝典論」「魏文帝與吳質書」「曹子建與楊德祖書」「德祖答書」というように今日の研究者も認める基本資料をあげ、その典論論文について解説し「案ずるに、この篇は建安文學の優劣を推論して、深切著明なり。文氣説また此に基く。」という。その第四は、漢末魏初の文體の變遷は、後漢の禰衡に始まると説く。「案ずるに、東漢の文は均しく和緩を尙ぶに、其の筆を奮いて直書し、氣を以て詞を運すは、實に(禰)衡に始る。鸚鵡の賦の序に謂へらく、衡因つて賦を爲る、筆は停輟せず、文は點を加へずと。他の文も亦然るを知る。是を以て漢魏の文士多く騁辭を尙べば、或ひは慷慨高厲し、或ひは溢氣空涌す。此れ皆衡の文これが先を開くなり。」と。このように検討すべき新しい説も見ることができが、總じて以上あげた四點からしても、漢魏晉南朝文學を研究する者は、文學史・評論史の研究にあたって、最初の畫期的な業績として劉師培著「中國中古文學史講義」を問題にしなければならぬのではないか。

二

わたくしの手もとに、王瑤著『中古文學史論集』『中古文學思想』『中古文人生活』『中古文學風貌』、劉師培著『中國中古文學史』、鍾祺著『中古詩歌論叢』がある。これらの書は、おおむね林田氏の書と同じ時代を對象としながら、『中古』と稱している。ちなみに『京都大學人文科學研究所漢籍分類目錄』を調べてみると、『中古文學』の呼稱の最も早いものは、徐嘉瑞著『中古文學概論』で民國一三年(西曆一九二四年)四月初版とあり、ついで劉

師培著『中國中古文學史講義』が民國二三年（初版は民國六年である）となっている。つまり中古文學の呼稱は正からのものである。また一九六一年に出版された、郭紹虞著『中國文學批評史』は、阿片戰爭以前の中國文學批評史を三つの段階に分つて、

上古期—上古より後漢まで

中古期—後漢建安時代から五代まで。

近古期—北宋から清代中頃まで。

とし、文學史の時代區分に従つたという。中國ではわたくしの知るところ、戦前戦後を通じてこの時代の文學を中古文學と呼んでゐるようだ。ここで結論をさきにいわせてもらえば、中國と日本と同じ時代を取り上げながら、こんなに違つていいのかということである。

林田氏はこの書を『中國中世文學評論史』と命名することについて、特別の理由をあげてはいない。また本文中にも中世文學のことは見出せない。しかし網祐次氏に『中國中世文學研究 南齊永明時代を中心として』の著書があり、廣島大學文學部内の中國中世文學研究會發行に『中國中世文學研究』という學術誌があり、「中國中世文學」の呼稱はそれなりに存在しているのである。また吉川幸次郎氏もその「六朝文學史研究への提議一則」のなかで、「中世」の文學、「中世」の文體などのことばを使って中國文學史の區分を論じている。「過去の中國の散文の文體の歴史が、三つの時期に分かれることは、學者に周知である。第一は、上古から前漢までのいわゆる「古文」、すなわち自由韻律の文體の時期、第二、後漢から唐までの「駢文」、すなわち散文もまた一定の韻律をもつた時期、

第三は、宋から清末にいたるまで、再び第一期の自由韻律の「古文」を典型として、その祖述を主流とした時期である。(中略) そうしてこの三區分は、單に文體という表現の變化ばかりでなく、それと關連し、またそれを有力な象徴として文學史の諸事象が變化する區分である。すなわちひろく文學史の時期の三區分となし得る。(中略) 更にまたこの文學史の三區分は、中國の一般史の區分としても、妥當し得るようである。故内藤虎次郎博士が首唱され、宮崎市定博士をもっとも有力な祖述者とする中國史三區分説、その古代、中世、近世の區分は、あたかもわれわれ文學史の三區分とするものと、合致する。」と。明らかに吉川幸次郎氏は、文學史の三區分説を主張している。また中國「中世」文學の呼稱にも同調されるかの如くである。しかし氏はこの文章のなかで、他の人がそう使っているものには括弧なしで中世と記しながら、自らが使う場合には必ず括弧をつけて「中世」の文學などとかき、また例えば、

要するに小尾君のいわゆる「中世文學」は、

とあるように、中世文學の呼稱に積極的には同調されていないのではないかと思われる。ところで、中國文學史の三區分説を明確に主張した最初の文章は、青木正兒氏の「文藝思潮の三大變遷」(支那文藝思潮)所收、昭和三年(發行)であろう。それによると、「今支那歴代の文藝思潮を通覽するに、凡そ次の三期の段階を踏んで發達して來てゐるやうに思はれる。上世 實用娛樂時代(上古より漢まで)。中世 文藝至上時代(六朝及び唐)。近世 傲古低徊時代(宋より清まで)。」と。氏はまた時代區分としては、中世の語を使っておられるが、いわゆる「中世文學」にあたると思われるものを、六朝文藝の用語をもってしておられる。このようにみると、文學史の三區分

については、おおむね、日本中國に共通する考え方のように思われる。すると何故中國に從來からあった「中古文學」の呼稱を「中世文學」に改めばならなかったか、その理由はどこにあるのであろうか。網祐次氏は、昭和三十五年發行の「中國中世文學研究 南齊永明時代を中心として」の自序のなかでも、その理由を明らかにしていない。廣島大學の「中國中世文學研究」の創刊號では、この時代の文學を中世文學と呼ぶことの理由について『「中世」というのは、別に學問的根據のある分類に従ったものではなく、吾々の便宜上の勝手な分類に従ったまでで、異論はあろうが、南北朝、隋、唐の時代を廣く含ませている。』という。しかし、この中世という時代區分が、中國史研究者の三區分說に對應して出て來てゐることは、さきの吉川氏の論文のとおりであらう。そこで中國史における時代區分の學說成立の經過を調べることとする。岩波講座『世界歴史古代5』に載せる堀敏一氏の論文によると「内藤湖南(1866—1934)は、かつて六朝・隋唐の時代を貴族政治の時代と特長づけ、そして唐から宋の間に中國史上の畫期的な轉換を認めて、貴族政治から君主獨裁政治へ移るものとし、これを「中世」から「近世」への移行であるとした。内藤のいう貴族政治は、貴族が皇帝の權力を制約するのをいうのであって、貴族なり皇帝なりの人民に對する支配をさすものではない。そこでその後の研究は、皇帝の人民に對する官僚制的支配との關連で貴族制をとらえようとしてきている。」また後者の學說に立つ西島定生氏は、アジア的な専制君子の人民に對する個別的人身的支配のなかに、中國古代帝國(漢—唐)の特質があるとみてゐるといふ。そもそも貴族制とは、堀敏一氏によると「もと王朝とは別個に、郷里の社會を基盤として形成されてきた豪族社會の秩序と、王朝の官僚制的秩序とが合致したところに成立したものであり、その意味でこの後の六朝社會を『貴族制社會』とよぶことができるであ

らう。」すなわち、豪族社會の秩序と官僚制的秩序の二つのどちらを重視するかによって、古代説と中世説とが分かれるらしい。この點を、川勝義雄氏は、岩波講座『世界歴史古代5』の「貴族制社會の成立」のなかで、「ところで、谷川道雄氏は一九六五年のはじめまでの學界の主要な動向を整理して、貴族制社會の理解に關する根本的な問題の所在を明らかにされた。そこで指摘された最も重要な問題の一つは、六朝貴族制が官僚制的な形をとることについていかに理解すべきか、ということであった。つまり『當時の支配層（貴族階層―筆者）が國家權力の存在によって始めて成立し得ているという意味で官僚的であるのか、それとも、支配層は國家權力の存在を前提とせず、それ自身として支配層であるが、ただその存在形態において官僚的性格を帯びるのか、という問題に歸着する。』」としながら、貴族階層が國家權力の存在によって始めて成立しえていると解する「貴族即寄生官僚論」と、これとは反對に、貴族階層は國家權力の存在を前提とせず、それ自身として支配層であると解する「中世貴族制論」とに分かれると説いて、古代説と中世説の基本的な相違を明らかにしている。つまり、後漢から唐までのこの時期を、古代に入れて中古とするか、また中世とするかについては、このような歴史認識に立つて選擇されなければならぬのである。林田氏がこの著書を「中國中世文學評論史」とすること、すなわち中世とすること、それ自體に反對するわけではないが當然中世を選擇する理由を明らかにするだけの用意周到さがなければならぬと思う。しかしその時代を大體後漢から唐までとしたことについては贊同の意を表すものである。またこの時代の研究者がこの二つの問題をただ便宜的ではなく、學問的に検討する必要があるように思う。今日行われている王朝によって斷代する文學史の方法も歴史認識に缺けて、安易すぎると思うからである。

本書の特色について。本書は第六章から構成されていて、第一章は總論で、中國文學全史を通して評論の對象となる資料の紹介、解釋、位置づけ等の第一節と、この時代を一貫して提起される主要テーマ「情と志」の問題をより概括的に展望する第二節とに分かれる。第二章は、魏晉の文學思想で、主に左思、摯虞、曹丕、曹植、陸機、葛洪等が取り上げられ、第三章は、魏晉時代の五人の詩人を論じた作家論、第四、第五章は、齊梁の文學理論で、主に沈約、裴子野、劉勰、鍾嶸、蕭統、蕭綱等が取り上げられ、この時期の代表作「文選」と「玉臺新詠」の文學論がのべられる。第六章は、主に顔之推、韓愈、朱子を取り上げられ、古文運動を中心に論ずる。これが本書の構成であるが、ここではこの順序に従って論じることはいらない。林田氏の研究がいつ始まり、初めは何をやっていたのか、後でどう變ったのかといったこと、つまり研究の展開過程と氏の問題意識の變遷といったことの理解のために、發表順に述べたいと思う。できるだけ各章各節の論文そのものにもふれていくが、省いたものもある。まず論文目録を年次別、初出誌、ページ數の一覽表を左にあげる。

昭和33年 嵇康評傳 「中國文藝座談會ノート」11 (1~16頁)

昭和34年 嵇康の詩にあらわれた飛翔のイメージ 「中國文藝座談會ノート」12 (1~21頁)

昭和35年 阮籍詠懷詩考—その孤絶の意識について 「九州中國學會報」6 (52~68頁)

昭和36年 郭璞における詩人の運命—遊仙詩の思想構造 「九州中國學會報」7 (47~63頁)

昭和37年 嵯康と魯迅(一)、(二)―嵯康集の校訂からみた魯迅 「中國文學評論」1、2 (10～14頁、12～16頁)

顏之推の生活と文學觀 「日本中國學會報」14 (107～124頁)

昭和38年 朱熹「楚辭集註」制作の動機―歴代楚辭評價の流れにたつて 「九州中國學會報」9 (30～41頁)

昭和39年 漢魏六朝文學論に現われた情と志の問題 「目加田誠博士還曆記念中國學論集」(329～352頁)

南朝放蕩文學論の美意識 「東方學」28 (64～77頁)

昭和40年 魏晉南朝文學に占める張華の座標 「日本中國學會報」17 (69～91頁)

昭和42年 「文心雕龍」文學原理論の諸問題―劉勰における美の理念をめぐる 「日本中國學會報」19 (131～143頁)

中國文學評論史への視座 「中國文化叢書」4 「文學概論」(283～314頁) 舊題「文學評論」

昭和43年 裴子野「雕蟲論」考證―六朝における復古文學論の構造 「日本中國學會報」20 (125～133頁)

蕭綱の「與湘東王書」をめぐる 「中國中世文學研究」7 (16～52頁)

昭和48年 韓愈における發憤著書の説 「文學研究」70 (九大) (11～35頁)

昭和49年 兩漢魏晉の辭賦論に流れる文學思想 「文學研究」71 (九大) (61～87頁)

左思の文學 「目加田誠博士古稀記念中國學論集」龍溪書舎刊

昭和50年 韓愈の散文表現論 「文學研究」(九大) 72 (893～913頁)

林田慎之助著『中國中世文學評論史』(小西)

昭和52年 葛洪の文藝思想 「文學研究」(九大) 74 (107~128頁)

唐代古文運動の形成過程 「日本中國學會報」 29 (106~123頁)

昭和53年 「典論」論文と「文賦」 「文學研究」(九大) 75 (45~66頁)

鍾嶸の文學理念 「中國文學論集」(九大) 7 (1~16頁)

昭和54年 「宋書」謝靈運傳論と文學史の自覺 「中國中世文學評論史」(267~285頁)

「文選」と「玉臺新詠」編纂の文學思想 「中國中世文學評論史」(399~419頁)

「嵇康の飛翔詩篇」(昭和33年)

儒教の道德秩序を否定し、世の價值觀にさからい、反禮教、反權力を貫きとおした嵇康は、身邊にいつも飛翔をばむ網羅がはりめぐらされており、「羅せられる」恐れに曝されているという危機意識をもっていた。「百羅、尉羅、高羅、網羅、或いは羅者のイマージュはいずれも自由な飛翔をさまたげる障害である。それは、現實が惹起する危機意識の映像である、」と。嵇康の飛翔詩篇にあらわれる飛鳥はいずれも鸞・鳳・鵬の飛翔寓話と合致するものであり、「羅網を尻目に」はばたく。それは嵇康の世界觀の根底にある莊子の哲學、鵬の飛翔寓話と合致するものである、とする。著者は最後に「述志詩」の第二首について、鸞鳳を笑う斥鷃の笑いに「これまでの生き方を誤りといわねばならぬ嵇康の胸に、脅かすような虚無の響きをつたえているかのようにである。」「虚無のうちにあって、却ってそのなから新しい飛翔の轉機をつかもうとしている不敵な詩人の逆説であったかも知れない。」と述べる。

「阮籍詠懷詩考―その孤絶の意識をめぐって―」（昭和35年）

著者は、先ず、「詠懷詩」に見られる肉親、交友、君臣の關係に對する阮籍の意識を考察して、「現實秩序の存在をもはやなにひとつ確實性のあるものとして信じてをやめた」人間關係における「孤絶の意識」がある、とする。次に「詠懷詩」に多く用いられている「驅車」「登高」の語についてその意味するところを探り、また、「岐路・染絲」の故事、「木槿」「蜉蝣」・「丘墓」「墳墓」の語、「白日・朝日・朱陽」などの太陽をいう語と「隕・隕・零・傾」という動詞を結びつけた獨特の表現の意味、について解明を試みて「危機意識」「死灰意識」を言い、これと表裏をなすものとして「登仙思想」について考察する。

「郭璞における詩人の運命」（昭和36年）

「晉書」郭璞傳、「世說新語」「資治通鑑」などの傳記資料と郭璞自身の詩文をもとに、怪異譚、予言譚をも含めて彼の人間像を考察し、また、「省刑疏」などの上疏文をあげて政治に對するかわり方を究明している。郭璞は元帝が崩ずると官を辭して故郷に歸る。著者は「遊仙詩」の製作時期を、政治への情熱が挫折したこの時期を外しては考えられないとし、これらの詩に、「内部世界の自由の獲得」「不自由と不條理からの解放」「人間をやめる變形への欲求」などを觀る。郭璞に關してはこの論文が戦後最初のものである。この論文までが林田氏の作家論の時代である。

「嵇康と魯迅」(一)、(二)―嵇康集の校訂からみた魯迅（昭和37年）

「魯迅のなかの嵇康」 「野草」所載（昭和47年）

林田慎之助著『中國中世文學評論史』（小西）

著者が、山口大學時代に學部卒業論文として選んだのが魯迅であった。魯迅研究こそ著者の今日までの研究過程の原點である。著者の研究の最大の特色もここにある。この二つの論文は本書に掲載されていないけれども、ここに取りあげたわけである。

「顔之推の生活と文學觀」(昭和37年)

顔之推の「顔氏家訓」は、家訓の體裁をとるにもかかわらず、著者自身の虜囚としての苛酷な運命と身を刻む恥辱を生きて來た論理を、骨肉に向つて切々と訴えた記録であるばかりでなく、その中に收められた文學論は特有の倫理性を強調し、文學者の行動とその文體との有機的な關連を論じようと意圖したものであるという。宇都宮清吉、守屋美都雄兩氏の「顔之推論」に伍して文學論的視點から書かれたものである。この論文は、その意味で林田氏が中國文學批評史へ第一歩を進め、日本中國學會報にはじめて投稿したものである。

「漢魏六朝文學論に現われた情と志の問題」(昭和39年)

著者は「毛詩」大序の「詩言志說」について、「情と志の言語概念を區別し、然もそれが關係する心の運動過程の機微をうまくとらえながら、一方では情を不當に低く評價しようとしている。」と。ここでは「情」は陶冶されねばならぬ「民の本性」と見なされているという。陸機「文賦」の「詩緣情說」においては、「志」は、「或る目的志向をもつ心のはたらき(文章を作ろうとする意欲)」という意味で用いられ、「情」は文學創造に缺かせない靈感の感應帶にあたり、「志よりも情を基本的な心の動きとみなして重視」していると、文學作品創造において「各々不可缺少なものとして均衡にあつかっている」と。梁の時代になると、「自然風物↓情感↓創作衝動の關係は廣く

深い領域にわたって具體的且つ詳細にほりさげられてくる」とし、鍾嶸の「詩品」、蕭統、蕭綱、劉勰の「文心雕龍」、范曄、沈約、裴子野らにおける「情」「志」の概念の微妙な違いを中心に、彼らの文學論について考察している。この論文によって、林田氏の中國文學評論への道が大きく開かれたといっている。しかも、文學評論に對する基本的な認識が提出されたと考えられる。

「魏晉南北朝文學に占める張華の座標」(昭和40年)

「鶴鶴賦」は「ある相對的な充足と小さな自己安住を求める小宇宙の思想を、普遍的な論理性を具有して定着させた」ものであり、そこには「本來消極的存在を、積極的な自己主張に切り換える非連續の論理がある」と。そして、これを「魏晉清談思想史の上で位置づけると、危機意識の點では嵇康・阮籍と共通性をもちながら、その老莊的小宇宙思想のうちには、兩晉官僚、貴族の清俗清談に轉化してゆく必然性を認めねばならぬ。この意味で、張華の『鶴鶴賦』は魏晉という政治史的思想史的轉換期におけるきわめて象徴的な作品であつたといえる。」と。「情詩の系譜」では、「文選」「玉臺新詠」以後清代まで張華といえは「雜詩」「情詩」とされてきたことを述べる。そしてこれは、「文選」「玉臺新詠」等の總集が導いた鑑賞享受の方向に責任があるとする。著者は、「情詩」のほかに「儒家的氣象」「老莊的氣風」の詩、「遊俠」「壯士」を歌つた樂府詩などが多くあり、「張華詩賦の思想的性格はその多面性に特質がある」として、艶情詩にかたよつた從來の觀方を修正すべきだとする。また、張華が西晉文壇形成において核の役割をしたことおよび、「博物志」を編輯製作したことを重視し、張華の「文學所産の多面性」を高く評價すべきことを主張している。

「中國文學評論史への視座」(昭和42年)

一、文學批評の成立、では、「詩經」の編纂について、「古代の民衆詩から三百篇をえらび、現在に傳わる『詩經』の體裁に整理したのは孔子だといわれるが、それを取捨選擇する過程に、すでに孔子の意識的な批評のはたらきがあったはずである。」と。本書に一貫して見られる、中國文學批評史における「詩文選集」の重要性に對する著者の認識が示される。漢代になって現われる「楚辭章句」「毛詩鄭箋」の章句や箋注も「批評の機能を充足するもの」であり、ここに文學批評の萌芽があるとしている。

二、詩文選集の編纂と文學批評、では、「文選」などの詩文選集および「文心雕龍」などの文學評論をとりあげ、紹介しているのだが、詩文選集の重要性を主張するに急なあまり、たとえば、『文章流別集』と『文選』は詩文を選録した選集であるが、これが文學批評の專著である『文心雕龍』『詩品』と一括されて「總集」の項に入っていることは、ふるく中國においては詩文選集が文藝批評學のうちに包括されていたことを意味するからである。」といった筆のすべりがある。選集が批評學のうちに包括されて、というのは事實でない。「隋書」經籍志集部、總集の書目のあとに、「總集」について説明したのち、「今次_ニ其前後、并_ニ解釋評論、總_ニ於此篇。」と。「解釋評論をも并せ」といっているのである。「文心彫(雕)龍」は、文體別に並べられたこの書目の文集の目の最後に、「詩品」は詩集の目の最後から二番目につけ加えられているのである。さて、「文章流別集」について「文選」「玉臺新詠」「文心雕龍」「詩品」をあげて六朝期の文學選集と評論の概要を、文學批評の視點から紹介している。隋・唐代では文學批評書として「顏氏家訓」をあげる。この時代詩歌選集も數多く現われるがいずれも「文學史的

眼光が欠落しているためすぐれた文學評價がうち出されず」片寄ったものとなっているとしている。宋以後については、「唐詩百家選」「四家集」「唐詩鼓吹」「元遺山集」など、唐詩のすぐれた選集が南宋から明にかけて現われる、と。詩話・詩評では「瀛奎律髓」「滄浪詩話」をあげる。明代になって「唐詩品彙」が流行し、盛唐模擬の文風を産み、「唐詩選」などの普及書の出るきっかけを作ったという。最後に宋・明・清の散文選集を簡単に紹介している。

三、文學史論、では、「文學史に對する最も顯著な自覺が認められるのは梁である」とし、昭明太子の「文選」序、梁簡文帝の「與湘東王書」「文心雕龍」時序篇をあげている。作家の史的位置づけでは、齊・梁において曹植が「詩神」の位置におかれ、宋代、李白・杜甫が「詩聖」となる。清初になって蘇東坡・黃庭堅が曹・李・杜に並んで加えられる、と。文學批評の停滞について。本格的な文學批評は、鄭振鐸の「中國文學史」魯迅の「中國小説史略」が出現する現代をまたねばならぬとしてその理由を四つあげている。

四、文學理論について。「毛詩大序と詩言志說」「文賦」と詩緣情說」「音律法則の發見」「詩品」―技巧主義の否定」「『文心雕龍』―道と文の理論」「復古文學の意義」「神韻說」の項目をたてて、近代にいたるまでの詩論を紹介し、「近代評論の先驅」として李卓吾、金聖嘆の出現について述べる。最後に「評論の文體」で中國の文學評論の形式は、あらゆるジャンル（文體）にわたっていることに觸れて論を終っている。この論文は、中國文學評論史を概説した好論文であるばかりでなく、林田氏が中國文學批評史を見通しその視野におさめたことを示すものであろう。

「裴子野『雕蟲論』考證—六朝における復古文學論の構造」(昭和42年)

この論文については、四、興膳宏氏の「書評」についての章でふれる。

「韓愈における發憤著書の説」(昭和48年)

韓愈は自ら儒教の正統を嗣ぐ者との自負をもち、その儒教思想に發した駢文否定、古文運動の實踐のゆえに博學鴻詞科の試験に三たび失敗し、地方官として失意不遇のうちに十年間を過す。著者は、この「失意の原體験」が「憤りを發して書を著す」の語をくり返し韓愈に吐かせ、また「平らかならざるものがすぐれた文學を生む」という「不平の文學論」を生み、更に「文章が羈旅草野にありて生まれるのはそこに窮苦愁思の聲があるからである」という「愁思の美學」を形造らせたのだとし、これらの文學思想、美意識が形成されてきた過程を跡づけている。この論文は、林田氏の問題意識の新たな展開を示すもので、この論文の書かれた年までの四年間、かの大學紛争の渦中に巻き込まれて、一篇の論文も書かれなかった後の飛躍である。

「左思の文學」(昭和49年)

著者は『三都賦』の序文をみると、左思は『禮記』の玉制篇に見える『詩經』采詩説を辭賦に適用させようとして賦論に持ちこんだ最初の人であった。「この采詩説を據りどころとして…寫實の精神を強調している。」という。そしてここに「現實主義の目がある」と述べる。「詠史詩」八首は、「史實に假托した自己表白」であり、その文辭は野なるものの雄勁な美しさをもつと。また、製作年代について、晉の咸寧五年の作であろうとする程千帆氏、咸寧五年から吳滅亡までの二、三年間の作であろうとする興膳氏の説に對して晩年の作と觀る。「これを歌う左思

はすでに數多の人生の辛酸をなめつくした老詩人であったと考えてみる。この老詩人の目からみれば、吳征討の大事件も……若き日のおのれの姿もすべてが過去の時間の中の出來事である。とすれば、これも、『詠史詩』にふさわしい素材ではないか。過去の自我像を素材としてあつかった、そこにこそ所謂『詠史詩』に對する左思獨自の見識があり、彼らしい矜持がこめられている。」と。そして、自らの若き日の事件である吳征討を歌った一首は他の七首の自序の役割を果たしており、「詠史詩」と題しているが、實は史實にかりた詠懷詩なのだといふ意識的な工夫がこらされていたのである。」と。そして第八首に人生の辛酸をなめつくした者が、死の足音を聞きながら孤獨をかみしめる痛ましい絶望が歌われていることはこれを裏づけるものだとし、詩の構成と内容から製作時期の推定を試みている。

「韓愈の散文表現論」(昭和50年)

韓愈が國子監に復歸してから後は、顯職榮譽を掌中に收め、充足した官僚生活を送った。「官界出仕と詩文表現が密接な關係にある中國文學史にあって、劃期的な文體改革をめざした古文運動が……多くの俊英をその傘下に集め、新しい文體創造を可能ならしめた側面に、彼の光輝ある官僚生活から繰り出された指導性と機動力を考慮の他におくことはできない」と、著者はとらえる。「古文運動」は、貴族門閥出身の官僚が後退する安史の亂後も四六駢儷文が官界において隠然たる力を持ち、これを改革するため、「古文」と稱するが、決して秦漢文學の復元模倣をいうのではなく、新しい時代の新しい文體の創造と確立をねらいとするものであり、新興地主階級出身の文人官僚による士大夫の意識の變革をめざすものであったとする。この論文では、「發憤著書の說」、「不平の文學論」、

「氣」と「奇」の説、文章は平易、苦澁に關係なく内容が問題だとする「文章難易論」、文章は必ず己れより出ずるものでなければいけないという「必ず己れより出ずる」説について例をあげて更に詳しく述べる。また、韓愈の文章は、古代聖賢の書からは「その意を學び」、駢文を否定しながら駢文の魅力を取り入れて、全く新しい文體を創造したことを述べている。

「唐代古文運動の形成過程」（昭和52年）

唐代古文の源流については諸説があるが、胡應麟の説は十分説得力のある卓見であるとし、著者はこの「胡氏説」を踏まえて傳記・文學資料のなから、その先覺的文學集團を復元し、……彼らの思想と文體に關する考察を加えながら、唐代古文運動が推動し形成されてゆく過程を可能なかぎり再構成」したいとしている。

韓愈の兄、韓會から始めて人間關係をたどり、人脈關係を整理してみると、古文家集團を三期に分けることができるという。元徳秀を頂點とする第一次古文家集團、始動期の第一次集團の人脈から出て安史の亂後に文人官僚となつて登場した韓會らの、展開期にあたる第二次古文家集團、更にこの人脈を媒介として韓愈・柳宗元が形成した完成期の第三次古文家集團。始動期の古文運動は元結の兄である元徳秀のもとに集つた文人たちの集團によつて始められる。この中から著者は李華と元結をとりあげて、その傳記、文體、文學觀について述べる。第一次集團は安史の亂に巻き込まれ不幸な戰亂體驗を持っており、戰亂の前と後では李華・元結ともに文體・思想内容に決定的な變化を見せている、という。次に、著者は第一次、第二次集團に屬した文學者群の思想が唐代古文完成者である韓愈の思想形成にいかなる役割を果たし、どのように影響を與えて、いかに集大成されていったかについて究明す

る。儒教思想、歴史觀、載道文學、經書の學習、六朝の駢文否定、六朝文學批判、漢代文學の尊重、藝術創作論における「氣」、と多方面にわたって、先人たちの影響が見られることをいちいち資料を對照しながらのべ「韓愈の文學思想の中核をなすものの原型が、すでにその人脈を形成してきた古文家たちの文學思想の中に發見できる」、と考察している。この、人脈關係をたどることによって影響關係を明らかにしていく方法は、文學史の方法の一つとして評價すべきものだと思う。著者はこの方法によって、韓愈に到る古文運動の流れを捉え得ている。ただ、この論では、一次、二次集團の内容的な違いが明確にされていない。著者の説が更に詳細に解明されることを期待したい。ところで、南朝文學の評價と、唐代古文運動とは相矛盾するものであろうが、林田氏はどう考えるのだろうか。

『宋書』謝靈運傳論と文學史の自覺（昭和53年）

この論文については、四、與膳宏氏の「書評」についての章でふれる。

四

與膳宏氏の「書評」（『創文』一九〇號）について。この書評はよく整理されていておもしろく讀ませてもらった。そのなかで與膳氏が疑義としてあげている三點を中心にみていくことにしたい。まず三點を列挙すると、

- 1 「雕蟲論」の制作年代と「文心雕龍」に及ぼした影響に關して。
- 2 沈約の「宋書謝靈運傳論」が鍾嶸の「詩品」に及ぼした影響及び玄言詩の旗手に關して。

林田慎之助著『中國中世文學評論史』（小西）

3 「玉臺新詠」の編纂の時期。

である。疑義の1は、主として林田氏の論文「裴子野『雕蟲論』考證—六朝における復古文學論の構造—」に關して提出されたものであらう。この論文は、林田氏によれば、「裴子野を頂點として形成された文學集團の性格、それをささえた思想の構造をみきわめるのが拙論のねらいである。」とし、「なかでも、裴子野の文學觀をみる事ができる『雕蟲論』一篇の制作年代について、從來の定説、例えば、鈴木虎雄氏、羅根澤氏などの説に訂正をせまる必要を感じるので、その考證に力點をおくことにした。」というものである。そして「雕蟲論」が「宋略」の一篇であることを決定した部分が、最も學問的興味をそそるところであったが、興膳氏も「ことに『雕蟲論』の歸屬を定めた文章などは、少少オーバーにいえば、千年の迷罔を拂ったといえなくもない手柄である。」と述べる。すると、問題は、「雕蟲論」の制作年代というより、「宋略」の制作年代ということにならう。ここで論争の對立點を整理する。林田氏が、「宋略」の制作年代を「沈約の『宋書』がかかれた永明六年（四八八）以降、齊の末年、ほぼ四九〇年代に」おくとすることに對して、興膳氏は積極的に自己の説を主張するわけではなく、林田氏の説のようにすると、「宋略」總序に「齊興りて後數十年、宋の新史、既に世に行なわるるなり。……新史に因つて宋略二十卷を爲る。」とあるから、興膳氏としては、「『齊興りて數十年』の一句がいかにも苦しくなりはせぬか。もし裴子野の言に忠實であらうとすれば、『宋略』の成立は五〇二年の齊滅亡の年と重なりあう可能性だつてあるはずである。」と云つて、可能性として五〇二年説を提出するのかもしれないと思つと、また「かつまた『宋略』が齊末に完成したにしても」と云つて、林田氏の説に近づぐようにも見える。齊末といういい方は、齊の末年といういい方より幅が廣

いと感ずる。要するに「齊興りて後數十年」をどう考えるか、林田氏にその解釋を求め、興膳氏自らもその一句に苦心しているというわけである。

この句のとおりに解釋すると、蕭道成が齊を建國したのが四七九年であるから、それから數十年、それを五十年と考えるならば、建國の年を入れて計算すると、五二八年、梁の大通二年ということになる。また數十年を二十年と解釋すると、建國から二十年は四九九年、齊の永元元年となる。つまり四九九年から五二八年までの間に「宋の新史（宋書）世に行わる」というわけである。沈約は五一三年に死んではいないが、世に行わるというのは、なにもその書が著されたことをいうわけではないから、死後宋書が流行したと考えられないこともない。しかしこの段階で、齊の建國後二十〇五十年にして宋書が世に行われたという解釋は、「梁書」の「齊の永明の末に及んで沈約撰する所の宋書すで行はる。」や「南史」の「齊の永明の末に及んで沈約撰する所の宋書……」と矛盾する。沈約が「宋書」を撰して功を畢り表して上たてまつったのは、永明六年（四八八年）二月である。その宋書が永明の末に及んでという、永明は十一年七月で終っているから、おおよそ永明十年か十一年ということになる。西曆では四九二年か四九三年である。齊の建國から數えて十四・五年である。すると「宋略」の總論の一句「齊興りて後數十年、宋の新史世に行はる」は、もともと「齊興りて十數年」とあったものを傳寫の間に誤ったものと、考えるほかはないであろう。そして「新史に因って宋略二十卷を爲る」のであるが、ここには「因って」作ったとかかかれても「直ちに」とはなっていないが、「南史、本傳」によると、「宋書」が永明の末に行われて、それに「裴松之已レ後、聞ゆるなし。」裴松之が死んでから裴氏の家で名の聞えた者はいないと書かれて、裴子野は發憤して「宋略」

に筆を奮ったのであろうと思う。「宋書」が世に行われてから久しくはたないうちに脱稿したと考える。さて、誤寫であらうとする推論が、もし認められるならば、「宋略」の制作年代の設定は、林田氏の説で一貫するであらうと思う。ところで、このことを調べていてわかったことであるが、林田氏が「宋書」の編纂が完了したのは永明六年（四八八）のことであると、本書の第四章第一節で書いているが、この時できあがったのは本紀列傳七十巻だけで、「宋書」の自序では沈約自ら「撰する諸志、成るを須[＊]ちて續けてたてまつらん。」といっている。「宋書」の八志三十巻は永明六年以後完成したのである。「宋書」の中華書局出版説明によると、「八志のなかで、『符瑞志』は鸞鳥を改めて神鳥と稱するが、これは齊の明帝蕭鸞の諱を避けたものであり、『律曆志』は「順」を改めて「從」に作るは、梁の武帝の父蕭順の諱を避けたものであり、『樂志』は鄒衍を稱して鄒羨と爲すのは、梁の武帝蕭衍の諱を避けたものである。して見ると、『宋書』の最終定稿は、まさに齊の蕭鸞が帝と稱した（四九四年）以後になるだろうし、はなはだしい場合は梁の武帝の即位（五〇二年）以後となるであらう。」という。「宋書」の完成は五〇二年から沈約の死んだ五一三年までの間ということになる。

つぎに、「雕蟲論」から「文心雕龍」への影響という問題について。興膳氏の指摘の問題を、林田氏の論文にあたってみると「この制作年代が訂正されれば、六朝文學批評論者の年代序列は變更を迫られることになり、いままで『文心雕龍』、『詩品』、『文選序』のあとにきていた『雕蟲論』が、もっと早い時期のものとなり、逆に他の批評の論著に、なんらかの影響を與えてきたことを考慮せねばならぬのもまた必然である。^⑧」の部分であらう。しかも註の中に林田氏の舊論文のなかで「雕蟲論」が「文心雕龍」および「詩品」に及ぼしたと思われる影響の一端に

ついでふれていると述べる。舊論文とは、「漢魏六朝文學論に現れた情と志の問題」と「文心雕龍文學原理論の諸問題」であるが、この二論文に眼を通したところ、「雕蟲論」と「文心雕龍」という兩書の制作年代を確定した上での論ではなく、同時代の一つの文學情況の説明として「雕蟲論」は使われ、「裴子野のように素朴な文學復古主義者でありえなかった」劉勰が、もう一つの文學情況にも一層懷疑的にならざるをえなかったと説明されているに過ぎない。つまり影響を及ぼしたといえる程のものではない。

疑義の2は、林田氏の論文「宋書」謝靈運傳論と文學史の自覺」に關して提出されたものである。この論文は、林田氏によれば、「古代から劉宋期に及ぶまでの文學の變遷をあとづけ、時代のすぐれた文學者を歴史のなかで洗い出し、評價してゆく文學史の具體的作業が展開されている。この意味でも畫期的な文學批評の論文である『宋書』謝靈運傳論が六朝批評史の上に占める位相をできるだけあきらかにするのが拙論のねらいである。」という。これに對して、興膳氏は、「その着眼點には敬服するのだが、沈約が後出の文學論に及ぼした影響ということになると、著者はどうも結論を出し急ぎすぎているような氣がしてならない。」とする。そして具體的な例として沈約の「宋書・謝靈運傳論」が鍾嶸の「詩品」に及ぼした影響の問題をあげる。ここで興膳氏は、林田氏が「沈・鍾兩者の説は表現方法に違いがあるが、東晉詩史批判の主旨はおなじである」として、沈約↓鍾嶸という影響を考え、その理由として、

1 沈約の「言を上徳に寄せ、意を玄珠に託せざるは莫し。滄麗の辭聞くなぎのみ」が鍾嶸の「皆平典にして道徳論に似たり。建安の風力盡く」と整合すること、

2 兩者が共に玄言詩の旗手を孫綽、許詢とみなすこと、

の二點をあげているとする。興膳氏は以上の二點に論點を要約しておいて、1に對しては、「文選」李善注が、宋・檀道鸞の「續晉陽秋」を沈約の「謝靈運傳論」の中の東晉詩史批判のこの部分に引いているのであるから、「鍾嶸がひとり沈約の影響下にのみあつて、檀道鸞の影響下になかったとどうしていえよう。」という。2に對しては、「玄言詩の旗手を孫綽、許詢とみなす」のは、沈約一人の創見でなく、江淹の「雜體詩」にもすでにそうであるという。「續晉陽秋」は「隋書、經籍志」によると「二十卷 宋永嘉太守檀道鸞撰」とあり、道鸞の傳は「南史七十二列傳六十二文學」に二十九字の短い記録があるだけである。しかし「世說新語注」には八十五條の引用が見られ、特に「文學第四」には十條に及んでいる。ことに沈約の「謝靈運傳論」に注として「續晉陽秋」が五か所にわたって引用される。(「世說新語」文學第四注にはこの五條が一文として出る。)
「謝靈運傳論」の成立を考える場合、かえつて「續晉陽秋」は無視できないのではないかと思う。孫綽・許詢についても「詢・綽は並びに一時の文宗にして、此れより作者は悉く之に化す」と、兩者を並擧している。ちなみに劉師培の「中國中古文學史講義」には「世說新語文學篇注」から「續晉陽秋」のこの一連の文章をすでにあげる。
ところで影響關係を證明することは大變なことだと考えさせられた。同じ主旨だから、同じことをいっているからといって、必ずしも影響關係があるとは言えないだろうし、そういう事實があるのに全く關係がないとも言えない。本書の第六章第二節「唐代古文運動の形成過程」のように、その思想的、文學的影響を人脈關係をとおして明らかにする方法は、ひとつの有効な手がかりであろう。

この書評に際して興膳氏の著書、論文を読んだが、この疑義の2と關係する論文と著書があった。それは「文心雕龍と詩品の文學觀の對立」(昭和四十三年)、「詩品」の翻譯と解説(昭和四十六年)、「宋書」謝靈運傳論をめぐって(昭和五十五年)、である。第一には「鍾嶸はひとり沈約に反撥しただけでなく、先輩の批評家劉勰の理論に對して旺盛な敵愾心を燃やしていたであらう。」とあり、第二には「一時は文學界を席卷する勢いを誇った文言詩も、一時代のちの批評からは、きわめて冷淡なあしらいを受けたこと、ひとり鍾嶸の論のみでなく、以下に引く沈約・劉勰の論評からも察知される。」と。第三には「沈約が構想した文學の歴史をこうして跡づけてくると、我々はどうしてももう一度あの檀道鸞の『續晉陽秋』との關連を考えざるをえない。」とある。

疑義の3は、興膳氏の説のとおりであろう。林田氏のこの論文『「文選」と『玉臺新詠』編纂の文學思想』は、文選と詩品を結びつける結節點として劉孝綽を設定したところが興味があった。

さてこれも興膳氏のものを読んで思ったことであるが、趣味の廣いことは比喩の幅をひろげるものらしい。研究者を野球人になぞらえたり、曹植や陸機を十種競技の代表的プレイヤーに仕立てたり、羨しい限りだと思った。

五

一か月の間、林田氏の「中國中世文學評論史」とつきあってきた。専門家でもないわたくしがひきうけたのだから、初めはいろんな本の讀みなおしである。そして使われる資料の多さに驚いて、どこからこの資料を見つけているのかなと疑った。そして辿って劉師培著『中國中古文學史講義』にぶつかった。そのさきへは、今のところ

行けないでいる。また調べたことは、研究者の論文の前後影響関係を明らかにすることであつた。六朝文學研究者として、林田氏ほか數人の方の著作年別論文一覽表を作つてみた。誰が最も早くその對象の研究を始めたか、そして誰が成果をあげたかに注意してみた。こんなことをしているうちに、時間が過ぎて林田氏の書を読むことが充分でなかつたのではないかと思つてゐる。この書を全體讀みとおして考えたことをかいておきたい。まずなんといつても大作である。この時期の文學評論史研究で取り上げなければならない人と作品および問題點が廣く丹念に取り上げられてゐる。しかも十五年間という長期の取り組みの成果である。つぎに先輩たちと同じ資料をあつかつていても、そこに新たな問題點が露出してくる見事さがある。林田氏の問題意識は銳角的である。三に文章がうまい。説得力があると思つた。

ところで、昨年讀んだ本に藤原正彦さんの「若き數學者のアメリカ」というのがある。そのなかに話はちよつと違ふのだが、大學院出の研究者の推薦狀を教授が書く話がでてくる。「日本では推薦狀と言へば、まずどんなものでも、結婚披露宴での新郎新婦紹介に近い内容だが、アメリカではそうはいかない。たとえばいい加減なことを書いて、それにより當人が採用されたとする。實力のはつきりする世界だから、遅かれ早かれ馬脚があらわれるであろう。そうなると、以後、その教授の推薦狀はもちろん、悪くすると教授自身の信用まで地に墜ちてしまうからだ。」という。わたくしはこの「書評」を書きながらいつもこの話を思い出していた。これほど眞劍に書評に取り組んでゐるか、書いたものに客觀性があるかと。そして今、忸怩たるものがないとはいえない。